



筑紫女学園大学リポジット

Expressiveness of British English in Towns : Part Three

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小木野, 一, OGINO, Hajime メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/152

街角の英国英語（その３）

—英語表現のあや—

小 木 野 —

Expressiveness of British English in Towns (Part Three)

Hajime OGINO

５．注意書き

注意書きによく用いられるのは、命令文である。命令文は前節で述べたように、その行動に従わせることを目的とすることが、その第一の機能であり、相手が特定される人々や一般的な人々であるので、主語が省略されることが多い。特に危険性が予測される場合や注意を喚起する場合に命令文が使用される。その使用例を見てみよう。

(62)



(62) は歩行者に対して、道路を渡る際にボタンを押して信号の変わるのを待つように注意しているものである。

(63)



(63) も歩行者に対して、赤信号のときはそこで待っているように注意している。

(64)



(64) は、駅前の横断歩道を渡る歩行者 (pedestrians) に対して、道路を横断するときは右を見て車に気をつけようように注意している。駅前の横断歩道の注意で車が優先権 (priority) を持っている。

(65)



(65) はクリケットの競技場の近くの遊歩道を通る人々にボールが飛んでくる危険があるので気をつける (be ware) ように注意している。

(66)



(66) は、駐車場の注意書きで、チケットをメーター機のところで買って、車の内側の前面に見えるように置いておく (display) ように指示している。windscreen (フロントガラス)は米国英語では windshield となる。



(67) は、列車に乗る際に、必ずチケットを買っておくように注意している。万ーチケットを持っていない場合は無制限の (open) 全額料金を支払うことになる。英国では切符の検閲は日本ほど頻繁に行われないが、もしチケットを持っていないことが発覚した場合は、忠告通り有無を言わず罰金を支払うことになり、それが抑止力になっていると思われる。



(68) は、火災の場合の非難口になるので、車を駐車しない (keep clear) ように警告している。



(69) は、トイレにものを入れると詰まって (block) しまうので、どんなもの (anything) も入れないように注意している。

同じ注意書きでも、命令文に please が付けられる場合がある。よく丁寧表現を用いる日本人は、英語で please を用いることによって、すべて丁寧になると考えている方が多いと思われるが、実は英語で please を付けることによって、逆に相手に強いプレッスシャを与えることになる (セイン・佐藤2006 : 42)。Please は本来動詞で、may it please you to ~ が縮小されて副詞として用いられているのであり、基本的には話者の利益 (speaker's benefit) を表す (Hofmann・影山1999 : 57)。命令文に please を付けることによって、ソフトな命令口調で、ぜひ守ってもらいたいことを依頼する表現になる。その用例を見てみよう。

(70)



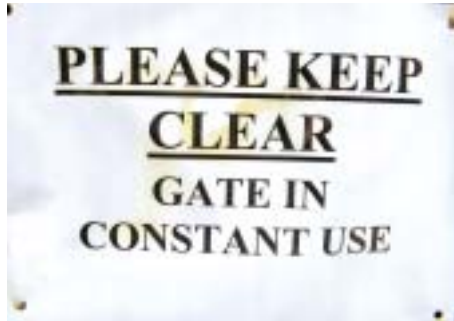
(70) は、乗車前に切符を買っておくように注意している。切符を持っていないことが発覚すると罰金 (少なくとも20ポンド) を払うことになる。上に少し見えているように警告 (warning) であり、表現以上の厳しさを含んでいる。

(71)



(71) は、階段を使用する場合は、(滑らないよう) 注意 (caution) を呼びかけている。

(72)



(72) は、前に挙げた keep clear に please が付いたものであるが、下線があるように、門の前に駐車しないようにという強い要請である。

(73)



(73) は、タバコの吸殻はそばの箱に始末する (dispose of) ようにという注意書きである。

(74)



(74) も、NOTE (注意する) とあるように、注意書きであるが、身体障害者のための駐車許可書を見えるように置いておかないと罰金 (penalty) が科せられる。それも下にあるように規則 (order) が適用されるという強いものである。

(75)



(75) も，門の前に駐車しないようにと，安全の注意（safety notice）を呼びかけをしている。

(76)



(76) は，地下鉄の駅でよく見かけるもので，エスカレータは右に立って，左側は急ぐ人のために空けるようにという注意書きである。

(77)



(77) は，お城に入城する際に，有効な（valid）チケットを持っていることを呼びかけているが，当然チケットが正当なものでないと入城は許可されない。

(78)



(78) は、必ず (do not forget) チェックアウトして部屋の鍵を返却するようにというホテルの注意書きである。

(79)



(79) は、道路の表面がでこぼこ (uneven) しているので、車の運転に注意するようにと呼びかけている。

次に注意書きに用いられるのが、助動詞 will である。助動詞 will には単純未来と意志未来があるとされているが、両方とも予測を表すという点では同じである。違いはその予測について、話者がどの程度確実性があると思っているかという点である (永本 205 : 34 - 35)。

(80) It will rain this evening.

(81) You will be quiet. (永本 2005 : 34)

(80) は、「今晚雨が降る」という単なる (確たる情報に基づかない) 予測を表している。しかし (81) は、話者が相手 (たぶん学生) が確実に私語を止めることを期待しているのであり、したがって期待どおりに私語を止めない場合はさらにきつく注意することになる。このような命令的な will の使用は発言者が権威をもっているか、他人にその行動の強制・命令できる立場にある場合に使用される (永本2005 : 35)。平述文でかつ will を用いた文は一見口調は柔らかく命令的な意味合いは一切感じられないが、文の意図としてはむしろ強い強制力を持っているということは、ことばのおもしろさと思議さを思い知らされる。アメリカ旅行中に観光バスの運転手が、乗客が降車するごとに

(82) You will have a wonderful afternoon.

と言っていたのを思い出すが、これは Have a wonderful afternoon と同じ意味合いを表すものであり、確実にそうなるであろうと予測したソフトな口調で丁寧な表現といえる。例文を挙げよう。

(83)



(84)



(83), (84) は、同じような注意書きであるが、大学当局（オックスフォード大学）が学生に、自転車を鉄の柵に許可無く鎖でつないでいる場合は、その自転車は撤去される（be moved）という、(83) にもあるように強い警告（warning）である。

(85)



(85) も、歩道に自転車を置いて、歩行者の妨害になる場合は、自転車は撤去されるという大学当局の注意書きである。

(86)



(86) は、駐車禁止区域に、車を駐車させると適切なる処置がとられるという警告である。

(87)



(87) は、パンティングボートに定員オーバーで乗ったり、ボートを閉店後に返却された場合には追加料金が課されるという注意である。

さらに、注意書きの表現として、発話行為 (speech act) 的にみて、遂行動詞が直接使われることがある。これも文型としては平述文であるが、次のように招待状などの丁寧な表現が求められる正式な文章によく用いられる。

(88) Mr. and Mrs. Waterson request the honour of your presence
at their daughter's wedding on 19 March 1985, 10.00 a.m.
at St. John's Cathedral. (Tsui 1994.107)

このように丁寧に依頼することにより、より強い拘束力をもち、ぜひ結婚式に出席してくれるように依頼することになるのは、前にも述べたように、まさにことばの表現のあやである。

集めた例を見てみよう。

(89)



(89) は、仕切り線から関係者以外は入らないようにという丁寧な依頼 (are kindly requested) であるが、これも守らないと直ちに守衛に注意される強い表現である。

(90)



(90) は、来訪者は歩道を通る (keep to the footpath) ようにという注意である。ちなみに keep to the right は「右側通行」という意味である。

(91)



(92)



(91) と (92) は、remind が使われているが、これもチェックアウトは10時まで、また所定の場所 (venue) での飲食物の持ち込みはできない旨の注意書きである。

(93)



(93) は、トイレを使用する最後の人 (the last person) と第三者的に間接に依頼する表現になっているが、実はこれもトイレを使用する当人に直接、使用後は電気のスイッチを切るように要請しているのである。これはホテルとか乗り物などに見られるつぎのような例と同様の丁寧な依頼である。

(94) Passengers will please refrain from flushing toilets on the train. (Brown and Levinson 1987.206)

(95)は、上で見てきたような注意書きと思われる文法的要素はなんら見当たらないが、at owners risk (自分の責任で) とあるように、ここに車を止めたり (park), (見当たらないが...) 駐車する (garage) ことに対する注意である。

(95)



6. 語形成

次に街角で見つけた語形成 (造語) について、分析を試みる。

(96)



(97)



(96) と (97) に見られる free の意味は、よく知られている「自由な」という意味ではなく、「～がない」という意味である。したがって alcohol free zone は「アルコールが自由に飲める所」ではなく、逆に「アルコールが飲めない所」である。違反すると罰金を払うことになる。mortgage-free は「抵当に入っていない」ということである。alcohol free と mortgage-free は名詞に形容詞が付加された複合形容詞であり、ハイホンが用いられる場合と用いられない場合がある。よく知られている例は tax-free (税のない—免税の), barrier-free (障害のない) などがある。また最近ホテルで見かけたものに smoking-free (喫煙のない) がある。これは nonsmoking の別のいい方である。

(98)



(98) の pre-, post- は、もともとラテン語系の接頭辞であるが、現代英語においては非常に生産的な接頭辞で語幹（接辞が付加される前の語）がラテン語系であるか否かは問わない。ロンドンの夜の観劇の多くは7時30分に始まり、9時30分に終わるので、観劇前のディナーを Pre Theatre Dinner, 観劇後のディナーを Post Theatre Dinner と称しているのである。ともに派生語である。

(99)



(99) は, photograph me 「私の写真と取ってください」という英語が短くなった短縮語と呼ばれるものである。これは最近日本の街角でも目にする「証明写真撮影装置」であるが, 非常にうまい造語である。

7. その他

その他としていくつかの例を挙げる。

(100)



(100) は, 「迂回路 (回り道)」 (diversion) の表示であるが, 米国英語では detour となる。

(101)



(101)は, 「道路工事が進行中である」という案内であるが, whilst は米国英語では while である。

(102)



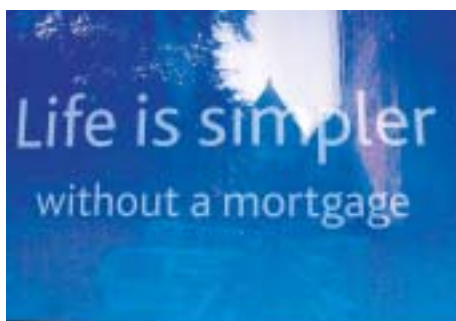
(102) の evil とは HIV のことで、AIDS 撲滅のためには、その原因となる HIV のことを知ることが重要であり、したがってその HIV (=evil) のことを聞いたことがないか (hear no evil?) と呼びかけている。Speak no evil? というキャンペーンコピーも見かけた。

(103)



(103) は、家のドアのところに貼ってあったもので、訪問販売を断る張り紙である。DO NOT と大文字が使われている。

(104)



(104) は、抵当に入っていなければ (without a mortgage)、人生はより気楽である (life is simpler) という銀行のキャンペーンである。

(完)

参考書目

- Brown, Penelope and Levinson, Stephan C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press
- Chomsky, Noam 1963. *Syntactic Structures*. Mouton & Co.
- デイヴィッド・セイン & 佐藤淳子. 2006. 「敬語の英語」 The Japan Times
- Hofmann, Th. R. ・ 景山太郎. 1999. *10 Voyages in the Realms of Meaning* くろしお出版
- 上條智子. 2006. 「広告における命令文 ― ポライトネス論理による分析 ― 」 北九州市立大学大学院修士論文
- 永本義弘. 2005. 「教えて欲しかったこんな英語」 南雲堂出版
- 尾崎哲夫. 2004. 「英語の看板がスラスラ読める」 新潮新書
- 竹村滋 (編者代表). 2006. 「新英和大辞典」 第六版 研究社
- 寺澤芳雄 (編集主幹). 1997. 「英語語源辞典」 研究社
- Tsui, Amy B. M. 1994. *English Conversation*. Oxford University Press

(おぎの はじめ：英語学科 教授)